電源立地地域温排水対策事業調査

藤　田　修　央・黄金崎　栄　一
十　三　邦　昭

発　表　誌　名

昭和63年度電源立地地域温排水対策事業調査報告書（東通地点）

抄　　録

1. ヒラメ浮遊期仔魚分布調査

東通村白糠～小田野沢海域において7月～9月にかけ延べ3回（計34点）、稚魚ネットによる昼間の中層曳（5分間）を行い稚仔魚の採集を行った。

ヒラメの浮遊期仔魚は一般的には沖合の高鹹域で、昼間は中層域に多く分布する事が知られており、また、本県日本海側での昼間の調査事例等から、今年度はこれまでの夜間の表層曳から昼間の中層曳で調査したが、ヒラメ仔魚は採集されなかった。

採集された稚仔魚では、前年同様7月～8月ではイワシ類を主体としたシラス型稚魚が多く、次いでメバル属稚魚の順であった。このほか今年は魚卵及びカニ類ゾエア期幼生が多いのが特徴的であった。

2. ヒラメ着底期稚魚及びイカナゴ成魚・未成魚分布調査

同上海域において10月～11月にかけ延べ2回（計13点）、桁網による採集を行った。

ヒラメは10月に水深5 mで1尾（全長32.3cm）、11月は水深5 m、10 m、20 mでそれぞれ1尾（全長11.5cm、15.0cm、12.1cm）の計4尾が採集された。これらの個体のうち10月に採集された1尾は耳石による年令査定から2年魚と推定された。一方、11月に採集された3尾は全長から推定すると3尾とも当才魚と思われた。

ヒラメの採集された場所は、イシガレイ等の他の生物も比較的多く採集され、底質は砂であった。

イカナゴは11月に水深10 mで1尾採集され、個体の体長等（体長12.2cm）から当才魚（未成魚）と推定された。

3. サケ稚魚分布調査

尻労、白糠、泊地区のイカナゴ光力利用敷網着業船に対し、混獲サケ稚魚の採集を依頼し、各地区から標本を得た。

標識魚（4月26日、老部川放流・10万尾、尾鰭上部切除）は、放流点南側の泊地区では放流から10日後に1尾再捕され、また、北側の尻労地区では4日後、6日後、8日後、9日後、14日後にそれぞれ再捕されている。

このことから、今年は放流場所の老部川より北側への移動は比較的早かったものと思われる。

胃内容物としては、魚類（イカナゴ）、橈脚目、端脚目（ヨコエビ類）、十脚目（エビミシス期幼生、カニ類ゾエア期幼生等）、クマ類、アミ類、昆虫類、多毛類（ゴカイ）など多種にわたり、一定の傾向は見られなかったが、大型魚ほど魚食性が強く、餌料の選択性は比較的少ないものと思われた。